＜報告・記録＞

The 13th International Convention of Asia Scholars への参加報告

（2024 年 7 月，於インドネシア共和国スラバヤ）

伊　藤　まり子
東亜大学人間科学部国際交流学科
ito_mariko@toua-u.ac.jp

《要　旨》

今年 7 月 28 日から 8 月 2 日にわたり，インドネシア共和国スラバヤで ICAS13 が開催された。ICAS は人文社会学の視点からアジアを対象地域に研究する世界の研究者のためのグローバルスペースである。筆者は 3 名のメンバーと共に「Women's Work-Life Balance in Asia: Rethinking from Anthropological and Gender Perspective（アジアにおける女性のワークライフバランス：人類学とジェンダーの視点からの再考）」というパネルを組み参加し，研究発表をおこなってきた。本稿はその報告である。

キーワード：ICAS13，スラバヤ，研究発表，ジェンダー，アジア女性

1. ICAS13 概要

今年（令和 6 年）7 月 28 日から 8 月 2 日までの 6 日間にわたり，インドネシア共和国スラバヤにて，The 13th international Convention of Asia Scholars（以下，ICAS13）が開催された。筆者は，研究代表をつとめる科学研究費基盤 C「現代アジア女性のサステイナブルなキャリア形成に関する比較民族誌的研究（21K01068）」の研究分担者 2 名および招へいメンバー 1 名とともに計 4 名でパネルを組み，研究発表を行う機会を得た。本稿はその報告である。

はじめに ICAS について紹介したい。ICAS は，人文社会学を中心とする様々な学問分野の視点からアジアを対象地域として研究する世界中の研究者のためのプラットフォーム International Institute for Asian Studies（IIAS）が主催者となり立ち上げられた [(1)]，アジア地域研究のためのグローバルスペースである。急速な変化を遂げるアジアの現実や，グローバル社会の中に位置づけられる「アジア的要素」を深く理解し，それへの新たな学問的視点を追求していくことを目指し，約 3 年ごとにアジア地域研究者が在籍する世界各地の大学や研究機関が IIAS とともに共同開催者となり国際学会として ICAS を開催している。これまでは，オランダのレイデン大学やオーストラリアのアジア研究協会（ASAA）をはじめとする西欧諸国のアジア地域研究拠点はもとより，マカオ大学，タイのチェンマイ大学など，アジアの有力大学も共同開催者となり，1997 年以来 2 万人以上の世界の研究者がこの ICAS に集い，研究発表や議論を展開してきた。また同時に，世界の著名な出版社や研究組織，NGO なども多く集い，出版物やそれぞれの活動について公開，展示することで，アジア地域研究に携わる多くの人びとの交流を促進する場にもなってきたのである。

13 回目となる今大会は「Crossways of Knowledge」を全体のテーマに掲げ，インドネシア共和国スラバヤにある Airlangga 大学と同大学付属研究機関である Airlangga

Institute of Indian Ocean Crossroads（ALLOC）が共同開催者となって，市街中心部に位置する同大学キャンパスを会場に開催された。世界が混乱を極めたコロナ禍以降初めての開催であったことから，IT 技術を駆使した会場設営やデジタルプラットホームの設置など，コロナ禍を経たからこそ可能となった技術革新を十二分に活用しつつも，コロナ禍による地域社会の「分断」を乗り越えたからこそ再認識された個々の参加者の対面的な議論や交流を重視した学術イベントも数多く企画された。

開催地であるスラバヤは，インドネシアの首都ジャカルタに次ぐ第二の都市であるが，アジア史を紐解くと，植民地時代のインドネシアで独立運動を牽引し初代大統領となったスカルノの出身地であり，同地もまたナショナリズム勃興と革命の中心となった地域として捉えられている。こうした歴史を鑑みると，インドネシアという独立国家の建設を目指して植民地主義と戦った歴史的舞台である同地において，アジアの地域社会がコロナ禍という脅威にいかに対峙し，ポストコロナの現在をいかに生きようとしているのかを問うという点においても，今大会は意義ある大会であったと言える。

その ICAS では大会ごとに複数の研究テーマが設定されるが，今回は以下の 10 テーマが提示された（以下，日本語訳は筆者による）。なお，文末の数字はテーマごとに分類された個人発表，パネル，ラウンドテーブルなどの総数である。

1. Uneven Geographies, Ecologies, Technologies and Human Futures（不均衡な地理，エコロジー，テクノロジー，そして人類の未来），93
2. From Oceanic Crossroads：Empires, Networks and Histories（大海の十字路から：帝国，ネットワーク，歴史），188
3. Prosperity, the Pains of Growth and its Governance（繁栄と成長の痛み，そしてその統制），90
4. Seeing from the Neighborhood：States, Communities and Human Mobility （隣人からの視点；国家，コミュニティ，人類の移動），106 グループ
5. Transmitting Knowledges：Institutions, Objects and Practices（知識の伝承：制度，モノ，実践），200
6. Using the Arts, Media and Culture：Contestations and Collaborations（芸術，メディア，文化の利用：議論とコラボレーション），133
7. Multiple Ontologies：Religiosities, Philosophies, Languages and Society（複数の存在論：宗教性，哲学，言語と社会），90
8. Negotiating Margins; Representations, Resistances, Agencies（周縁を交渉する：表象，抵抗，エージェンシー），216
9. Foodscapes：Cultivation, Livelihoods, Gastronomy（フードスケープ：栽培，暮らし，ガストノミー），69
10. Healing Bodies：Medicine, Well-being, Sport（身体の癒し：医療，ウェルビーイング，スポーツ），63

研究テーマが多岐に渡ることは，現代アジアの多様化やグローバル化が一層進展していることの顕れであり，また研究者自身もその社会の変化に応答するべく，アジアの地域社会が直面するさまざまな研究課題に取り組んでいる証左といえるだろう。

ICAS に集う多様な研究発表は，単独発表，パネル，ラウンドテーブル，ワークショップなどの異なる参加形式をとりながらも，関連のあるこれらのテーマに分類されて発表スケジュールが組まれる。参加者に配布された資料および大会 HP を参照すると，今大会では，各テーマが発表形式の異なる 60 から 200 を超える研究発表によって構成されており，その合計だけでも 1248，個別の研究発表本数を数えると 1359 本に達していた。また各参加者の所属先は 600 カ所にわたる世界の大学および研究機関等で，日本からの参加者が所属する大学や研究機関は，最も多かったインドネシアの 105 カ所に次いで，74 カ所を数えた（ICAS13 2024）。

以上のように，世界各地から，アジア地域研究をリードする著名な研究者だけではなく，筆者のような研究途上の中堅，若手研究者も数多く集まり，それぞれの研究発表を行い，活発に議論を展開し，アジア地域研究の更なる発展やその可能性について様々に意見を交換する大会となったのである。

2. 研究報告

次に，筆者が参加したパネルについて述べていきたい。筆者は，菅野美佐子氏（青山学院大学），木曽恵子氏（宮城学院女子大学），そして櫻田涼子氏（育英短期大学）の 3 名のメンバーとともに，「Women's Work-Life Balance in Asia: Rethinking from Anthropological and Gender Perspective（アジアにおける女性のワークライフバランス：人類学とジェンダーの視点からの再考）」という研究課題のパネルを組み，発表申請をした。その後 , 大会実行委員会による審査をへて採択通知をうけ , テーマ 8「Negotiating Margins; Representations, Resistances, Agencies（周縁を交渉する：表象，抵抗，エージェンシー）」に分類されたうえで，7 月 30 日（火）11 時 15 分から 13 時（現地時間）にかけて研究発表を行った。なお，上述のように，本パネル発表は，文部科学省科学研究費補助金（基盤 C）「現代アジア女性のサステイナブルなキャリア形成に関する比較民族誌的研究」の成果報告の一環として計画されたものである。

ジェンダー平等が普遍的価値観として認識される現代社会において，アジア諸国では女性の高学歴化と社会進出の進展が注目されるが，当事者であるアジア女性たちが就学や就職などのライフコース選択をどのように実現しているのか，その交渉の過程についての研究は未だ途上にある。加えて，従来のアジア地域を対象とするジェンダー研究は，西欧社会で生起した女性運動の萌芽以降に西欧の女性研究者による西欧的価値観に基づいて取り組まれはじめたこともあり，アジアルーツの女性研究者による当事者研究が着手されるまでのアジア女性は，二重の意味での従属の客体として描かれてきた。すなわち所属する社会で実践される儒教や仏教，ヒンドゥー，そしてイスラームの影響を受けた家父長制に縛られた存在という文脈と，そこから解放されるための西欧的価値観への啓蒙の対象という文脈である。本科研では，こうした既存の女性研究の視点を乗り越え，アジア女性の経験とその視点にねざしたキャリア形成とは何かを問い，それを比較することにより，従来のアジア女性の描かれ方を再考することを目指している。メンバーである菅野氏，木曽氏そして筆者の 3 名は，それぞれにインド，タイ，ベトナムでの人類学的研究に長年従事しており，ラポール関係を築いたフィールドの女性たちの声を紡ぐことによる民族誌的研究の成果を，今まさに取りまとめている。

これを基礎とする本パネルでは，菅野氏を招集者とし，また日本の短期大学に通学する女子学生を対象に研究する櫻田氏をメンバーに加えて，南アジア，東南アジア，東アジアそれぞれの地域社会の女性たち個々人の経験から，彼女たちが自身のライフコースとキャリア形成をいかに考え，日々の生活の中で交渉しながら実現しようとしているのかについて，比較の視点から多角的に議論することを目指した。なお，筆者を含めた各メンバーの研究課題は以下の通りである。

・菅野美佐子；Convenor, Panel Chair, Presenter
「Glossing over Gender Norms: The Cunning Agency of Hindu Women in Career Orientation and Marital Life（ジェンダー規範を乗り超える：キャリア志向と結婚生活におけるヒンドゥー女性の強かな主体性）」
・伊藤まり子：Presenter
「Career Building with Others: Life Course Choices of Highly Educated Women in the Northern Region in Vietnam（他者と共にあるキャリア構築：ベトナム北部地域における高学歴女性のライフコース選択）」
・木曽恵子：Presenter
「No one is Completely Independent:

Economic Independence and Acceptance of Dependency Among Educated Women in Rural Northeast Thailand（完全に自立している人は誰もいない：東北タイ農村における高学歴女性の経済的自立と依存の受容）」

・櫻田涼子：Presenter

「I am still figuring out what I want to do: Career Education and Self-actualization of Female Students at a Junior College in Japan（なにをしたいか分からない：日本の短期大学における女子学生のキャリア教育と自己実現）」

インド女性を対象にした菅野氏による研究発表では，ヒンドゥー教に基づく厳しいジェンダー規範により，婚姻後もさまざまにその行動が規定される女性たち個々人のライフコース選択について取り上げ，「保守的な家族主義」と「急進的な個人主義」が拮抗する現代インド社会において，女性たちがジェンダー規範に単に従属するのではなく，さまざまに交渉し，その規範を乗り超えながら，自身の主体構築を模索していく過程を指摘した。

2 番目はベトナム北部地域の女性を対象とする筆者の研究発表であった。ここでは，社会主義化にともない女性の社会進出が当然視された世代を親にもち，当該社会の経済発展期に就学，就職を選択している 30 代の高学歴女性たちによる結婚や出産，そしてキャリア構築の両立を事例にして，女性たちはキャリア構築を個人の自己実現として捉えるのではなく，家族や親族と共にある人生選択として捉えることを指摘した。そして従来の経済的依存関係を基礎とする「家族主義」の議論とは異なる家族関係を背景としながら彼女たちの事例を分析していく必要があることを提示した。

3 番目の木曽氏の研究発表では，東北タイ農村出身の高学歴女性を対象にして，既存のフェミニズムにおいて主流となってきた女性の経済的自立の議論を批判的に検討した。そこでは，都市でキャリアを積む女性たちがパートナーや農村の家族の生活を経済的に支えると同時に，農村に暮らす家族には自身の子どもや老親のケアの面で依存したり，女性たちにとっての将来の居場所を担保するといった相互依存の関係性が維持されている事例を介して，経済的依存を否定的に捉えないことによる女性のキャリア実現のあり方を指摘した。

最後は日本の短期大学の女子学生を対象とした櫻田氏の研究発表であった。ここでは，地方都市の短大に在籍する女子学生たちが自身の「やりたいこと」を見いだせない状況のなかで，学校が提供するキャリア教育に参加していく過程を事例として提示し，結果として女性の主体性や自己実現が追求されていくというよりもむしろ，地方都市において「適した」人材教育の枠に絡めとられてしまう女性たちの現状を指摘した。

本パネルには 30 名ほどの聴衆が集まった。各研究発表のあとの質疑応答では，複数の質問や意見がそれぞれに出された。例えば筆者の研究発表に対しては，ロシアからの参加者による意見が出され , 同じ社会主義を経験した地域としてベトナムとの状況に共通性があるとして，比較研究できれば興味深い議論が展開できるとの提案があった。

最後に，ICAS13 には非常に多くの日本人が参加していたことはすでに述べた通りである。このことは日本人研究者によるアジア地域研究が今日においても盛んに取り組まれていること，そして多様なトピックによる研究成果が発信されており，日本におけるアジア地域研究の多様性が担保されていることを示唆している。しかしながらこれらの学問的知見が，現在の日本社会が取り組む「多文化共生」の理解に十分に反映されているのかを考えると，疑問を呈さざるを得ない。日本人研究者として世界への研究発信は当然のことと捉える一方で , それと同時に国内の人びとに向けても，とりわけ日本の将来を担う若年層に対する教育のなかで，アジアの変化や可能性，そしてその多様な様相を積極的に発信していくことで，近年再び問題化している民族差別や人種差別を乗り越えた真の「多文化共生」の実現の一助になるのではと痛感する機会にもなった。

註

(1) IIAS はオランダ王国レイデン市に本部を置くアジア地域研究の国際拠点である。

参考資料

ICAS13（2024）, *Conference and Festival Programme*, IIAS/ICAS, Surabaya

A Participation Report of The 13th International Convention of Asia Scholars (Surabaya, Indonesia, July 2024)

Mariko, ITO Ph.D.
Department of Human Science, University of East Asia
ito_mariko@toua-u.ac.jp

Summary

ICAS13 was held in Surabaya, Indonesia from July 28 to August 2 this year. ICAS is a global space for researchers who conducting in Asian studies from a humanities and sociology perspective. I participated in the conference as a member of the panel “Women's Work-Life Balance in Asia: Rethinking from Anthropological and Gender Perspective” with three other members, and gave a presentation on the theme. This is a report of our participation in the conference.

Keyword: ICAS13, Surabaya, Research Presentation, Gender, Asian Women